フォーカスのカートグラフィー[1]

遠藤　喜雄

要旨

本稿では、Haegeman (2010) による英語の副詞節の分析を出発点にして、日本語と英語の副詞節の特質を考察しながらフォーカスの性質を議論する。特に、VP を境にして前提 (presupposition) と断定 (assertion) が分割されるとする Diesing(1992) の写像仮説 (mapping hypothesis) を Rizzi (1997) の考えを用いることにより洗練して、TP（テンス句）周辺を境にして前提と断定が分割される可能性を示唆する。さらに、この考えにより Miyagawa (2010) で提案された日本語に TP とその上との２つの箇所に主語位置があるとする立場が支持されることを見る。

キーワード ： カートグラフィー、前提、断定、主語位置

０．序

本稿では、Haegeman (2010) による英語の副詞節の分析を出発点にして、日本語と英語の副詞節と主語の特質を考察しながら、フォーカスの特質を議論する。特に、VP を境にして前提 (presupposition) と断定 (assertion) が分割されるとする Diesing(1992) の写像仮説 (mapping hypothesis) を再考する。具体的には、Rizzi (1997) の考えを用いて写像仮説を洗練することにより、前提と断定が分割される境目が TP（テンス句）周辺にある可能性を示唆する。さらには、本稿の考察から、Miyagawa (2010) で提案された日本語に TP とその上とにある２つの主語位置があるという考えが支持されることを示唆する。

本稿は次のように構成されている。まず、第１節において、Haegeman による副詞節の分析を出発点にして、日本語学において論じられてきた日本語の副詞節を考察し、その性質が相対最小性 (Relativized Minimality) から導き出されることを見る。第２節においては、第１節の考えをもとに、Diesing の写像

仮説を洗練する可能性を示唆する。第３節においては、本稿の考えの帰結として、Miyagawa が提案する TP とその上の２つの主語位置があるという考えが支持されることを見る。第４節は全体のまとめである。

1．副詞節中における介在効果

Haegeman (2010) は、主に英語における条件を表す副詞節の内部構造を考察し、その内部に Cinque(1999) 階層における高いムードの副詞が生じないことに着目する。

(1) a．*If frankly he's unable to cope, we'll have to replace him.(Speech act)
b．* If they luckily /fortunately arrived on time, we will be saved. (Evaluative)
c．*If George probably comes, the party will be a disaster.(Epistemic)
d．*If the students apparently can’t follow the discussion in the third chapter, we’ll do the second chapter.(Evidential)

Haegeman は、この事実を Relativized Minimality (RM) から導き出すことを提案している。RM は、概略、同じタイプの要素が別の同じタイプの要素の移動を阻止する局所性の原則 (locality principle) である。Haegeman は、下に見るように条件節において非現実のムード（irrealis mood）の階層からゼロ演算子が条件節の主要部 if が占める Subordinate Phrase（Sub）の指定部に移動するとする。この非現実のムード演算子が他のムード副詞を飛び越すと RM の違反が生じる。そのため、条件節内部には、高いムードの副詞が生じないのである。

(2) [Sub [~~MoodP~~$_{\text{speech act}}$>~~MoodP~~$_{\text{evaluative}}$>~~MoodP~~$_{\text{evidential}}$> ~~ModP~~ $_{\text{epistemic}}$>TP >MoodP$_{\text{irrealis}}$
↑ Op

この考えは、野田 (1989) の論じる日本語の副詞節の分析にも有効である。まず、野田の考えの出発点は南 (1974) による文の階層構造にある。例えば、「並べーられ (ボイス) ーてい (アスペクト) ーる (テンス) ーようだ (ムード)」

という機能範疇の語順に見るように、日本語では機能範疇が階層的に配列されている。南は、副詞節に機能範疇の階層構造においてどの機能範疇までが生じることが可能かという視点から日本語の副詞節を分類した。野田は、この考えを洗練して、日本語の副詞節の内部に生じる機能範疇と副詞節が主節と呼応する機能範疇の間に次の規則性を発見した。

(3) 動詞＜ボイス＜アスペクト＜テンス＜ムードという文の階層構造において、副詞節の内部に生じる機能範疇は、その副詞節が主節と呼応する機能範疇よりも下の要素である。

具体例を見よう。例えば、次の (4a) に見るように、主節のアスペクトと呼応する「ながら」を主要部とする副詞節は、(4b) に見るように、その副詞節内部にアスペクト階層の下にあるボイスの機能範疇を含むことはできるが、アスペクト階層よりも上にあるムードやテンス等の機能範疇を含むことができない。この規則性はどのような原則により説明することができるのであろうか。本稿では、RM の局所性にその答えを求めることを提案する。(4c) の派生を見よう。このアスペクトを表す「ながら」副詞節においては、その主要部「ながら」が基底においてアスペクト階層の主要部を占め、そこから副詞節の Subordinate Phrase の主要部に移動する。この主要部移動により飛び越されるアスペクト階層より上位のテンスやムードといった機能範疇は同じ主要部というタイプなので RM の違反が生じる。その結果、アスペクトの副詞節の内部には、アスペクトよりも高い機能範疇が生じないのである。

(4) a. テレビを見ながらご飯を食べた /* 食べ始めた。
b. 批判され (* てい / た) ながら答弁を終えた。
c. Voice<Aspect<~~Negation<Tense<Speaker's Mood~~ < ~~Interpersonal Mood~~<Subordinator
ながら

同じ説明は、(5)-(8) に見るように、他の副詞節にも当てはまる。つまり、否

定と相関する「ずに」節、テンスと相関する「時に」節、話し手のムードと相関する「ので」節、対人ムードと相関する「が」節において、その主要部「ずに」「時に」、「ので」、「が」が基底において、それぞれ否定、テンス、ムードの主要部の位置に生成され、そこからSubordinate Phraseの主要部に移動する。この移動において飛び越される上位の機能範疇は、同じ主要部というタイプであるので、RMによりこれら上位の機能範疇は各副詞節の内部に生じることは不可能となる。

(5) a.よく見ずに買った / 買わなかった。
　b.そんなところに立ってい（* な / かった）ずにこっちに来て座りなさい。

　c.Voice<Aspect<Negation<~~Tense<Speaker's Mood< Interpersonal Mood~~<Subordinator
　　ずに

(6) a.僕が宿題をしていなかった時に、兄はすでに宿題を終えていた。
　　（絶対テンスの解釈不可能）
　b.太郎がまだ生まれていなかった（* だろう）時、私は東京に住んでいました。
　c.Voice<Aspect<Negation<Tense<~~Speaker's Mood < Interpersonal Mood~~<Subordinator
　　時に

(7) a.安いので買った /?? 買おう
　b.雨が降た（*だろう）ので、道がぬれているのだろう。（絶対テンス解釈可能）
　c.Voice<Aspect<Negation<Tense<Speaker' sM ood < ~~Interpersonal Mood~~<Subordinator
　　ので

(8) a.環境は良いが不便です /?? 不便ですか。
　b.雨は降るだろう（よ）が、私は出かけます。

c．Voice<Aspect<Negation<Tense<Speaker’s Mood < Interpersonal Mood<Subordinator

が

日本語と英語の違いは、移動される要素にある。つまり、英語では演算子という「句」が移動されるのに対して、日本語では「主要部」が移動されるのである。RM により、主要部は同じ主要部というタイプの要素を飛び越せないので、日本語の副詞節においては、各々の主要部の基底の位置から上の機能範疇が生じないのである。

ここで、日本語の副詞節において移動するのが主要部であるという考えの証拠として、(9) に見る英語の事実に着目しよう。この文 (9) は、when が主節の出来事を表すか (high construal)、埋め込み文の出来事を表すか (low construal) で多義的である。この多義性は、Larson (1990) により次のように説明された。when と結びつく時を表すゼロ演算子は、主節から when の位置へ移動するか、埋め込み文から when の位置へ移動するかの２つの可能性がある。前者の場合、時の演算子は主節から移動するので、when が主節の述語が表す出来事と結びつく解釈が生じる。一方、後者の場合には、時の演算子は埋め込み文から移動するので、when が埋め込み文の述語の表す出来事と結びつく解釈が生じる。ここで重要なのは、when が埋め込み文と結びつく解釈である。演算子移動は長距離移動が可能であるため、when と埋め込み文の出来事が関連する意味解釈が可能となる。

(９)　I saw Mary in New York when [$_{IP}$ she claimed [$_{CP}$ that [$_{IP}$ she would leave.]]]
　　(ｉ)high construal: at the time that she made that claim
　　(ii)low construal: at the time of her presumed departure

一方、(9) の英語に対応する次に見る (10) の日本語の文においては、副詞節の主要部「時」が埋め込み文の「出かけた」という出来事と結びつく解釈が存在しない。この事実は、日本語の副詞節において、主要部が移動するという本稿の考えから導き出される。主要部移動は演算子移動とは異なり、長距離の移

動を許さないので、「時」は主節において移動する選択肢しかない。そのため(10)は、「時」が主節の出来事と結びつく解釈しか持たないのである。

(10)　私は [[花子が出かけると] 主張した時に] ニューヨークで彼女に会った。
　(i)high construal: 彼女が主張した時
　(ii)*low construal: 彼女が出かけた時

次に、本稿の分析の帰結を見よう。近年、主要部移動が統語的操作であるか否か (=PF の操作) についての議論がなされている。もっとも最近では、Roberts(2010) が、Chomsky (2008) の主要部移動が統語部門ではないという考えに異を唱え、主要部移動は統語的な操作であるという議論を展開している。本論での考えは、主要部移動が統語操作であるという考えを支持する。なぜなら、PF の操作は隣接する要素に作用するが、上で見た副詞節内の制約は隣接しない広い領域にまたがって作用するからである。

２．写像仮説再考：フォーカスの性質と領域

本節では、上で見た日本語の副詞節の分析から、フォーカスの性質を論じる。具体的には、日本語の副詞節にはフォーカスになるタイプとならない２つのタイプがあることを指摘し、この違いを Diesing の提案する写像仮説を洗練することにより説明を試みる。

まず、次の具体例 (11) を見よう。(11) においては、「ながら」「ずに」「時に」の副詞節は分裂文のフォーカスになることは可能であるが、「ので」「が」の副詞節は分裂文のフォーカスになることは不可能であることが示されている。

(11) a.太郎がご飯を食べたのはテレビを見ながらです。
　b.太郎が勉強したのはテレビを見ずにです。
　c.太郎が出かけたのは雨が降っていた時です。
　d.?? 太郎が出かけなかったのは雨が降っていたのでです。
　e.*太郎が出かけたのは雨が降っていたがです。

つまり、テンスよりも下の機能範疇と相関する副詞節は分裂文の焦点になれるのに対して、テンスよりも上の機能範疇と相関する副詞節は分裂文の焦点になれないのである。このフォーカスに関わる事実はどのような原則により説明可能となるのであろうか。本稿の提案は、Rizzi(1997) のフォーカスに関わる原則にその答えを求める。Rizzi は、「フォーカスは前提と整合しない」という原則を提案している。具体的には、Rizzi はトピックと異なり、フォーカスは 1 文中に 1 つだけしか生じないという事実に着目し、これはフォーカスの機能範疇がその下の階層の補部に前提 (presupposition) の意味を付与するためとしている。前提はフォーカスと意味的に整合しないという原則により、フォーカスの下の階層にフォーカスが再び生じると、意味解釈の衝突が生じるのである。

この考えにより、(11) で見た副詞節の分布が次のように説明される。まず、階層的に高い「ので」「が」の副詞節は文中で背景 (background) や前提と解釈される点に着目しよう。具体的には、次に見るように、野田の観察するテンスより高い階層的に属する「ので」「が」の副詞節は、会話や談話において話し手と聞き手の間で了解済みの事柄として解釈されるため、(11d, e) に見るように、それらの副詞節が疑問のフォーカスと解釈されることは不可能である。（＊/?? は、括弧内部の副詞節が疑問のフォーカスとして解釈することが難しいことを表す）

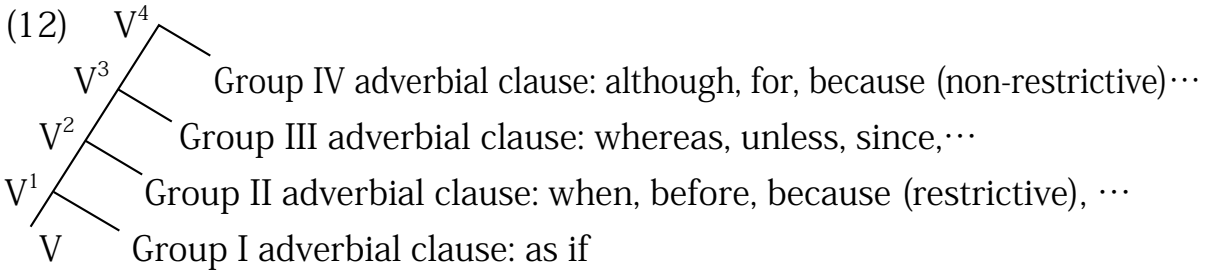
(11’) a . 太郎は [テレビを見ながら] ご飯を食べたのですか。
b . 太郎は [テレビを見ずに勉強したのですか。
c . 太郎は [雨が降っていた時に] 出かけたのですか。
d .?? 太郎は [雨が降っていたので] 出かけたのですか。
e .*太郎は [雨が降っていたが] 出かけたのですか。

上の事実は、テンスより上の統語的位置が「前提」となる統語領域にあることを示唆している。野田が観察するように、「ので」「が」節は、テンスより上の位置で相関する副詞節であるので、統語的に主節のテンスより上に生じ、「前提」(presupposition) の領域にあり、前提の意味解釈を受ける。しかし、前提はフォーカスの意味と整合しないという Rizzi の原則により、「ので」「が」節

は分裂文 (=11) や疑問 (=11') のフォーカスになれないのである。一方、テンスより下は「断定」(assertion) の統語領域で、その領域に生じる副詞節は断定と解釈される。その結果､テンスよりも下の階層に生じる「ながら」「ずに」「とき」といった副詞節は、断定と解釈され、フォーカスの意味と整合する。そのため、これらの副詞節は、分裂文のフォーカスの位置に生じることが可能となる。(「ので」類がフォーカス可能な話者は、TP の上のムード階層までが、断定の領域となる。)

以上の考えを巨視的に見ると、統語的に低い領域は断定の領域でフォーカスと整合する一方で、統語的に高い領域は前提の領域でフォーカスと整合しないと言える。この傾向は、英語においても見られる。この点を、次に見る Nakajima (1994) による副詞節の 4 分類を見ながら考察しよう。

(12)



これら 4 種類の副詞節は次の統語テストにより峻別される。

Group I の副詞節：動詞と強く結びつき動詞句代用表現の do so の外に生じない。

Group II~IV の副詞節：動詞と強く結びつかず、動詞句代用表現の do so の外に生じる。

(13) a. *John treated us as if we were beggars, but Mary did so as if we were aristocrats.

b. John came here before I arrived, but Mary did so after I arrived.

c. John will attend the class unless he is busy, but Mary will do so even if she is busy.

d． John was telling a lie, because his face turned red, and Mary was doing so, because her attitude was restless.

Group II の副詞節：否定のフォーカスになれる。
Group III の副詞節：否定のフォーカスになれない。[2]

(14) a．They didn’t treat us as if we were babies.
b．They have not been living here since their father died.
c．She is not beautiful whereas her sister is beautiful.
d．He cannot speak Japanese well, because he lived in the U.S. for a long time.

Nakajima は、(14) の事実を、次のように説明する。(i) Group I~ II の副詞節は否定の階層より統語的に低い位置にあるのに対して、Group III~IV の副詞節は否定の階層よりも高い位置にある；(ii) 否定の作用域は否定の階層の主要部に c 統御 (c-command) される、否定の階層よりも低い統語領域である。これらの仮定をもとに、Nakajima は、Group I~II の副詞節は、主節の否定の階層よりも低い統語位置にあり、副詞節が否定のフォーカスとなる部分否定の解釈が可能となるとしている。しかし、この考えには次の問題があるように思われる。Richard Larson（私信および個人談話）が指摘するように、同様の違いは、疑問の作用域にも反映されている。具体例を見よう。

(15) a．Did they treat us as if we were babies?
b．Have they been living here since their father died?
c．Is she beautiful whereas her sister is beautiful?
d．Can he speak Japanese well, because he lived in the U.S. for a long time?

ここで意図されている解釈は、次の英文のパラフレーズにより表される話し手が副詞節の内容を聞き手に求める疑問のフォーカスの解釈である。この疑問の

フォーカスの解釈は、次に見るように否定のフォーカスと同様に Group I~II の副詞節には可能であるが、Group III~Group IV の副詞節には不可能である。

(16) a . Is it as if we were babies that they treat us?
b . Is it since their father died that they have they have been living here?
c . ≠ Is whereas her sister is beautiful that she is beautiful?
d . ≠ Is it because he lived in the U.S. for a long time, that he can speak Japanese well?

ここで重要なのは、疑問の作用域が否定の事例と同様に、否定の階層よりも下の領域にあるとは考えにくいという点である。つまり、疑問の作用する領域は、テンスの階層よりも上の CP の統語的に高い領域であるので、疑問の作用域が否定の作用域と同様に C 統御により決定されるとは考えにくい。むしろ、副詞節が疑問や否定のフォーカスになれるか否かは、その副詞節がフォーカスの意味解釈と整合するか否かによると考えられる。より具体的には、Group I~II の副詞節は「断定」を表す副詞節で、疑問や否定のフォーカスと整合するが、Group III~IV の副詞節は前提を表す副詞節で、疑問や否定のフォーカスの意味と整合しない。そのため、Group III~IV の副詞節は否定や疑問のフォーカスになることが不可能となる。この考えは、次の事実により支持される。ここでは、Group III~IV の統語的に高い副詞節が分裂文のフォーカスになれないことが示されている。これは、Group III~IV の副詞節が統語的に高い前提の領域にあるため、Rizzi の原則によりフォーカスとは整合しないためである。

(17) a . It was because it rained heavily that they stayed home all the day.
b . They have not been living here because their father died.
c . *It was while she resembles her mother that her sister resembles her father.
d . *She is not beautiful whereas her sister is beautiful.
e . While I agree with you up to this point, I cannot agree to your point as a while.

ここに見る英語における副詞節のフォーカスの可能性は、上で日本語の副詞節

に関してみたフォーカスの可能性と並行的である。つまり、英語と日本語は、共にTP周辺の高い統語領域を境にして前提と断定が峻別されているのである。

では、断定と前提の意味はどのように副詞節に付与されるのであろうか。本稿では、Diesing (1992) の写像仮説 (mapping hypothesis) を洗練することにより、この問いに答えることを提案する。写像仮説とは、「VP を境にして、それより上の統語領域は前提、それより下の統語領域は断定の意味解釈が付与される」という趣旨の仮説である。より具体的には、Diesing は、写像仮説から boys などの冠詞を伴わない複数形の不定裸名詞 (indefinite bare plural noun) の意味解釈を導き出そうとした。例えば、不定裸名詞は VP の外にある場合には、前提の意味を表す総称などの意味を表すのだが、これは、不定裸名詞の変項 (variable) が普遍量化詞の制限句に生じ、そこで前提の意味が付与されるためであるとした。本稿は、この考えを副詞節の事象項 (event variable) に拡張することを提案する。つまり、副詞節がテンスよりも上の階層に生じると、その副詞節の持つ事象変項が普遍量化詞の制限句に生じ、前提の意味が付与される。この考えによれば、Nakajima の Group I~II の副詞節は TP 内部で認可されるのに対して、Group III~IV の副詞節は TP 外部で認可されることになる。(Group III~IV の副詞節が TP の外にあることを経験的に示すのは、これからの研究課題である。ただし、Richard Larson(個人談話) によると、Group IV に属するとされる非制限的な副詞節は、TP 前置 (TP preposing) の適用を受けにくい。このような統語テストが英語の副詞節が認可される統語位置を見極める際に、有用であろう。)[3]

さて、Diesing と本稿の考えの違いは、前提と断定の領域を動詞句の階層（VP）とするかテンス周辺の階層（TP）とするかにある。Diesing の考えの根拠は、ドイツ語の談話副詞 doch の分布にある。つまり、doch の左に不定名詞が生じると、それは動詞句の外にあることを示し、前提と解釈されると主張している。しかし、最近 Cardinaletti (2010) の研究により示されているように、談話を表す doch やイタリア語の談話副詞 mica は従来考えられてきたよりも統語的にはかなり高いテンスの階層の近くの領域にある。すると、不定名詞が談話副詞 doch の左に生じることは、その要素が動詞句の階層より上にあることばかりでなく、テンスの階層よりも上にあることをも示していると考えること

ができる。実際に、上で見た日本語の副詞節の分布は、この可能性を強く示唆している。

次に、日本語の副詞節の派生を見よう。本稿では、Haegeman の考えを洗練して、日本語の副詞節においては、主要部がテンスの階層の内部から Subordinate Phrase に移動するとした。この移動はなぜ生じるのであろうか。移動の主たる性質は、意味の二重性 (duality of meaning) にある。つまり、要素は移動前の基底の位置で意味役割が付与され、移動先の位置でスコープや談話に関わる別の意味が付与される。この二重の意味を付与されるために自然言語には移動という操作が関与するのである (Rizzi 2006)。Cinque(1999) は、副詞の意味役割も基底の機能範疇で付与されるとした。本稿では、この考えを副詞節に拡張して、副詞節もその IP 内部の基底の位置でアスペクト、テンスなどの意味役割が付与され、Subordinate Phrase の位置でそのスコープが付与されるという派生を想定する。

では、日本語の副詞節内部で移動が関与する証拠として、次の (18) を見よう。移動の性質として、ある限られた環境において再叙代名詞 (resumptive pronoun) を許すという点がある。そして、副詞節の主要部も、代名詞的表現を伴えば、文中に生じることが次に見るように再叙代名詞が可能である。

(18) 太郎が<u>その時</u>に来た。
　　<u>なので</u>太郎は来なかった。
　　<u>だから</u>太郎は来なかった。
　　<u>だが</u>太郎は来なかった

以上、(i)Haegeman (2010) の条件を表す副詞節の分析を洗練して、日本語の副詞節の派生を英語の条件副詞節と同様に移動が関与するとし、(ii) テンス周辺の階層を境目にして、それより上に生じる副詞節は前提と解釈され、それよりも下に生じる副詞節は断定と解釈されることを見た。これにより、Diesing の写像仮説を少なくとも事象項に関して洗練する可能性があることを示唆した。

３．２つの主語位置

本節では、写像仮説を TP 周辺の領域に改訂するという前節における考えの妥当性を、文における統語的な主語位置を見ながら考察する。Miyagawa (2010) は、文には、(i) テンスの指定部と (ii) その上の２つの統語的な主語名詞句が占める位置があると主張している。この主張の根拠を見よう。まず、主文の主語として普遍量化表現「全員」が否定文に生じた場合、(19a) に見るように、その主語は否定要素よりも広い作用域を持ついわゆる全文否定の解釈しか持たない。一方、主語が埋め込み文に生じた場合、(19b) に見るように、部分否定の解釈が可能となる。

(19) a.全員が試験を受けなかった。(SOV in root: all>not, *not>all)
　　b.全員が試験を選ばないと思う。 (SOV in embedded: all>not, *not>all)

Chomsky (2008) の提案に従い、Miyagawa は、英語等において ϕ 素性という文法素性が移動の引き金となるのに対して、日本語等の談話が顕著な言語 (discourse prominent language) においては、フォーカスやトピック等の談話に関わる素性が移動の引き金になると主張する。この考えによれば、フォーカスやトピックが生じる主文においては、主語の名詞句は、談話に関わる階層である TP より上に位置する α P の指定部に移動する。Miyagawa は、否定の作用域は TP までであると仮定し、この仮定により主文においては主語の名詞句が TP より上に生じると、主語名詞句は否定の作用域の外になる全文否定の解釈のみを持つとした。一方、トピックやフォーカスといった談話要素が生じない埋め込み文においては、談話と関連性を持たない α P は生じることはない。その結果、主語名詞句は TP の指定部に移動し、否定の作用域の中に納まる部分否定の解釈を持つ。

ここで提示したい問は、なぜ否定の作用域が TP まで拡張されるのかという問題である。Miyagawa はこの問題には解答を与えていない。一方、本稿の考えによれば、主文の主語が否定の作用域に収まるのは、前節で示唆した写像仮説の改訂版により自動的に導き出される。つまり、TP より上の領域は前提の

領域なので、TP よりも上に生じる α P は常に前提と解釈される。前提と解釈される要素はフォーカスとは整合しないので、前提と解釈される主語名詞句が否定のフォーカスと結びつく部分否定の解釈は生じることはない（ここで「否定と結びつく」とは、Rooth (1995) の「フォーカスと結びつく」(association with focus）という意味である)。その結果、主文においては、テンスよりも上にあるトピックやフォーカスに関わる α P という階層に主語名詞句が生じ、テンスより上は前提の領域なので、Rizzi の原則により主語名詞は否定のフォーカスとは整合しない。つまり部分否定の解釈が不可能となる。一方、埋め込み文においては、トピックやフォーカスに関わる α P という階層がないので、主語の名詞句はテンスの指定部に生じる。写像仮説によりテンスまでは断定の領域となり、否定の作用域となるのが可能となる。その結果、埋め込み文に生じる主語名詞句は否定のフォーカスと解釈されることが可能となる。つまり、部分否定の解釈が可能となる。

ちなみに、2 つの主語位置は英語にもある。次の具体例（20）を見よう。Miyagawa が指摘するように、主語が高い話し手のムードの副詞に先行する場合、それは部分否定に解釈されない。この事実は、「高い話し手の副詞の左＝テンスより上の階層」という図式を示唆していると思われる。つまり、英語においては話し手のムードの左に生じる名詞句は、談話に関与する α P にあり、前提の領域に生じる。その結果、Rizzi の原則により、高い話し手の副詞の左に生じる主語名詞句は否定のフォーカスと整合せず、部分否定の解釈が不可能となるのである。

(20) Everyone {probably/unfortunately/as far as I know} has not done the homework.(Miyagawa 2010: 81) [4]

4．まとめ

本稿では、Haegeman (2010) の英語の条件節の分析を出発点にして、日本語学の研究により発見された野田の規則性が局所性の原理Relativized Minimality から導き出されることを見た。そして、その帰結として、前提と断定の違いが日本語の副詞節にも見られるという新たな事実を考察しながら、Diesing

(1990) の写像仮説を洗練することを試みた。そこでは、テンス周辺の階層を境にその上が前提と解釈され、その下が断定と解釈されるという考えを示唆した。そして、Rizzi の「前提はフォーカスとは整合しない」という原則により、テンスよりも上に生じる副詞節は否定や疑問や分裂文のフォーカスになれないこととを示唆した。さらには、本稿での考えが Miyagawa (2010) の提案するテンスの階層とその上の階層の２箇所に主語位置が存在するという考えを支持することを見た。

注

[1] 本稿は、2010年6月に神田外語大学で開催された井上ゼミ、2010年8月に北京語言大学（中国）で開催された Generative Grammar in Old World (Glow) in Asia VIII、2010年9月に University of Ghent（ベルギー）で開催された Generative Initiative in Syntactic Theory (GIST) 2および2010年11月に北海道大学で開催された Cartographic Approaches to Generative Syntax で発表した論文の一部に加筆修正を施したものである。次の方々からは有益なコメントをいただいた。心より感謝の意を表したい (敬称略)：Adriana Belletti, Cedric Boeckx, Guglielmo Cinque, Liliane, Haegeman、井上和子、Richard Larson, 宮川繁、奥聡、Luigi Rizzi, 斉藤衛、Reiko Vermeulen。尚、本稿の研究は、日本学術振興会科学研究費助成金（基盤研究 (B) (#21320079) 研究代表者、遠藤喜雄）「談話のｶｰﾄｸﾞﾗﾌｨｰ研究：主文現象と複文現象の統合を目指して」の支援を受けてなされている。

[2] Nakajima は、さらに Group I, II, III の副詞節は文頭に置くことができるのに対して、Group IV の副詞節はそれができないことを観察している。

(i) a. (*)As if he knows everything about it, he behaves.
b. So that they could arrive there before the sun set, they started early in the morning.
c. While I agree with you up to this point, I cannot agree to your plan as a whole.
d. *So that they are now in Paris, they used an airplane.

Haegeman (2010) は、高い副詞は長距離の前置が可能であるのに対して、低い副詞は前置が不可能であることを示している。

(ii) * Frankly, I do not understand that he wants to leave.
By tomorrow I think the situation will be clear.

[3] 野田の発見した規則性によれば、副詞節はその内部構造が豊かになればなるほど、主文の高い位置で認可される。実際、談話に関わるムード表現が生じると、その副詞節は前提と解釈され、否定や疑問のフォーカスになることが不可能となる。

(i) おそらく雨が降るだろうから、出かけない。(から＞ Neg)
(ii) おそらく雨が降るだろうから、出かけるのですか。(から >Q) (cf. Ohseki (2010))

[4] 英語では、コンマに先行する主語はフォーカスになりにくい。この現象は、コンマで囲まれた要素全般に見られる現象であるように思われる。例えば、コンマで囲まれた非制限的な関係詞節は、制限的な関係節とは異なり、否定の作用域に入ることはない。

(i) I didn’t see a man, who had had some/*any drinks.

この文においては、関係節に否定極性表現が生じているが、主文の否定により認可されない。同様に、代名詞が非制限的な関係節に生じると主文の位置から変項束縛 (variable binding) をすることが不可能である。

(ii) Every Christian forgives John, who harms him. (Safir 1986: 672)

束縛変項も否定極性表現と同様に c 統御により認可される。このことから、コンマで括られた要素は主文より高い位置に生じることが示唆される。McCawley (1982) は、コンマで囲まれた要素 (parenthetical) は、主文の要素を交差して、それに囲まれる要素よりも高い位置を占める３次元の句構造を想定した。このコンマに囲まれた要素にまつわる現象は、カートグラフィーの枠組みにおいて次のように説明可能となる。CP 領域の最も高い ForceP のさらに上に Comma Phrase1があり、その指定部にコンマで囲まれる要素が移動した後で、残りの要素が、さらに上の Comma Phrase2の位置に移動する (remnant movement)。CommaP の指定部に生じる要素には主要部から二次的情報 (primary information) という意味が付与される。そして、Comma Phrase２の指定部に生じる要素には、一時的情報 (primary information) という意味が付与される。この一次的情報や二次的な情報といった違いは McMawley の構造では導き出されないカートグラフィーの枠組みによりはじめて可能になる説明である。また、非制限的関係節には、弱交差 (weak crossover) 現象も見られない。これは、移動が非制限的な関係節においては関与していないことを示唆している。Haegeman(2010) では、非制限的な条件を表す副詞節において、高い副詞が生じることが可能である事実をもとに、移動が関与していないことを示唆している。これも、コンマにより囲まれた句に見られる現象の一例である。

参考文献

Cardinaletti, Anna. 2009. German and Italian Modal Particles and Clause Structure. Ms., Universit? Ca’ Foscari di Venezia.

Chomsky, Noam. 2008. On Phases. In *Foundational Issues in Linguistic Theory. Essays in Honor of Jean-Roger Vergnaud*, eds. Robert Freidin, Carlos Peregr?n Otero and Maria Luisa Zubizarreta, 133-166. Cambridge, MA: MIT Press.

Cinque, Gugilmo. 1999. *Adverbs and Functional Heads: A Cross-Linguistic Perspective*. Oxford: Oxford University Press.

Coniglio, Marco. 2009. Italian modal particles as root phenomena. Paper read at Root Phenomena ZAS, Sch?tzenstr. Berlin.

Diesing, Molly. 1992. *Indefinites*. Cambridge, Mass.: MIT Press.

Endo, Yoshio. 2007. *Locality and Information Structure: A Cartographic Approach to Japanese*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.

遠藤喜雄 . 2009「話し手と聞き手のカートグラフィー」『言語研究』vol. 36, pp. 93-120.

Endo, Yoshio. 2010.?A syntactic view of head movement: a cartographic approach to adverbial clauses. Paper presented at GLOW in Asia VIII, China.

Endo, Yoshio. 2010. Interpersonal modal?particles in non-Root sentences: head feature movement, Paper presented at GIST 2, Belgium.

Haegeman, Liliane. 2010. The movement derivation of conditional clauses. *Linguistic Inquiry* 41 (4): 595-621.

Larson, Richard. 1990. Extraction and multiple selection in PP. The Linguistic Review 7. 169-182.

McMawley, James. 1982. Parentheticals and discontinuous constituent structure. Linguistic Inquiry 13 (1): 91-106.

Miyagawa, Shigeru. 2010. Why Agree? Why Move?. Cambridge, Mass.: MIT Press.

Noda, Noosi. 1989.「文構成」宮地裕（編）『講座日本語教育１』東京：明治書院

Oseki, Yohei. 2010. 命題志向モダリティの推論スコープと統語構造 .「日本語モダリティ関連現象」における発表 . 北海道大学 .

Rizzi, Luigi. 1997. The fine structure of the left periphery. In Liliana Haegeman, ed., *Elements of Grammar: Handbook in Generative Syntax*, 281?337.Dordrecht: Kluwer.

Rizzi, Luigi.2004. Locality and left periphery. In A. Belletti ed. *Structures and Beyond*: *The Cartography of Syntactic Structures*, Volume 3. 223-251. Oxford: OUP.

Saito, Mamoru. 2006. Optional A’-scrambling. In *Japanese/Korean Linguistics* 16, 44-63. Stanford: CSLI Publications.